



西籍概論

四



3
51
4止



仁口門
號 51
卷 4



西籍慨論講本卷之四

平田先生講談門人及傳聞人等書記

叔趙匡胤ハ、後周の王位ヲ奪ヒ取テ國王トシテ是
の宋の太祖といふ二程子朱子の類ヒ多く乃學者
の世に出たる宋の代と云ハ、こ乃趙匡胤が國号で
ムホの宋乃代と成ても國中始終一統致し多ると
南之夫ハ契丹夏金遼於と云大國ともみか帝と稱
して別小年号を立常ふ所として穩ふらき既に八
代目の徽宗は右九代目乃欽宗と云二人の王ハ金
の國と云て御國南は蝦夷と云様か國から攻ら



れて擒にせられ其意ひそ國へはれて行りれて爰
に於て宋ハ一旦亡びて王ハ九代年數百六十
七年御國てハ崇徳天皇の大治元年に當め年てハ
叔宋の徽宗欽宗二人の王ハ金の國へはれらきて
國ハ亡びふも又徽宗ハ九人めの子と位ル
即ち是より後ハ南宋の代と云てハ是より後も
く右の金契丹復ハ云國より攻られて一日を
穩むるもふハ都を敵に追落しと杯してせはか
く人ら出て敵軍退け良計をれをかと思へ倭人
の云事ヲ聞て其忠臣ヲ殺しなせして夫てもふ

く九代續いてとくハ蒙古と云國乃志ハ鳥
獸の様に去て居ハ國よて攻入れ祢ホサレ亡び
て去りて去てハ是ハ御國てハ後宇多天皇の弘安
二年乃事てハ此南宋の代ハ百五十三年つぐま
しハ叔蒙古と云ハ漢土の東北と西の方はて打
開ハ多ハ大國て則韃靼と入組て居る國て其内
一所ヲ領し居る鐵木真といハ者ハ彼のはしも
強ハはは契丹と始ハ夏遼金と字も七して帝
と稱し國号と元と改ハ鐵木真と五人目の忽必
烈ハはは契丹と始ハ夏遼金と字も七して帝
烈ハはは契丹と始ハ夏遼金と字も七して帝

して元乃世祖と云ふれり事て、其勢ハ誠に竹
子破るゝ如く實尔からて此元の世祖程勢ハ猛ら
るハ無儀とて、此王ハ宋多亡し、其時ハ丁と御
園てハ後宇多天皇の弘安時分の事、其傍の大
國とも城をろかし其勢に乗じて、かし、くも御國
子侍へに、うか、ひたりし奉ん乃志、有て其返へ
龜山天皇乃御代、文永六年をわ渡々使を奉つて、う
か、ひ申さ、は處、御取上も、かく、刺へに其使小来
是る者の首、侍へに切て仕、ま、津と程乃事故、尔、世
祖、ハ大泥に腹、成、小、け、る、文永十一年と、弘安四年

と、兩度、せ、免、来、つて、かの神風、に、吹、破、ら、も、い、ハ、此、時
の、と、て、ハ、亦、れ、ハ、古、道、の、大、意、に、申、し、さ、る、通、り、て、ハ、
叔、世、祖、ハ、カ、羅、國、中、ハ、一、統、致、し、て、王、ハ、十、代、八、十、年
余、國、以、多、も、ら、順、宗、と、云、り、時、に、謀、及、人、に、ひ、く、と、
く、起、て、又、各、々、帝、と、稱、し、其、内、朱、元、璋、と、云、も、の、比、に、
に、元、を、亡、し、て、國、を、奪、ひ、明、の、大、祖、と、云、ハ、是、り、事、て、
ハ、此、元、世、の、亡、び、の、年、々、御、國、て、ハ、後、村、上、天、皇、の、正、
平、二、十、三、年、後、光、嚴、天、皇、の、應、安、元、年、に、所、さ、る、年、の、
事、て、ハ、○、叔、明、の、大、祖、ハ、カ、羅、國、を、一、統、し、て、其、死、た、
後、小、孫、乃、朱、允、效、と、云、り、位、に、つ、た、こ、も、と、惠、帝、と、云、

所ら其叔父下朱棣といふ者謀反起して、惠帝を
殺し、位子奪はれて、是より太宗と云ふ、永樂と云ふ、此王の
年号なり、此王より十一代目の神宗と云ふ、萬曆二
十年と云ふ、御國の文祿元年と云ふ、その秀吉
公の朝鮮に御討ち出されて、皆去に、其年より、此時明
が大小わち恐きて、騷ぶると、八翁が取我慨言に記
し置れた通りなり、乃て、○叔此の王より萬曆四十六
年に古よりりの禽獸といひ、死たる所乃、韃靼
此國にて奴兒吟といふ者軍を起して、明に國へ攻
入り、是より致して、五へ、其仇は、四拾年より、

も苦しめらるゝと、御國の万治二年、此國
の年号永曆十三年と云ふに、明へ、孫本、其、韃靼に亡
けられて、去は、は、つて、ム、其時鄭成巧と云ふ、あつて、是
ハ元来明人鄭芝龍と云ふ者、九州肥前の松浦へ来
て、御國の女と、何ふて出来、るも、乃て、夫故り、余程
武勇の勝れ、者、始、於、臺灣の國、多攻、是、落し、夫と
是、い、ま、わ、れ、と、致し、明に入、り、明主の、韃靼に、せ、は、ら、れ
て、其程、ハ、永昌と、い、ふ、處、へ、見、了、か、け、も、か、く、た、は、ら、れ
る、字、取、立、て、韃靼と、退治、せん、と、致し、し、ふ、れ、共、謀、ひ
ふ、其、事、ふ、ら、む、し、して、死、ん、だ、と、云、ふ、此、者、明へ、忠、義

字盡し、いふに、つて、其息賞といひして、明王を以て、
則ち王の姓を朱氏とせしむるに、よして、其朱氏を以て、
朱成功や名のほして、國姓爺といふは、是が事と
いふに、^{國姓爺}いふや、^命彼國をも其國王乃姓と國
姓といふ、其國姓は賜はる人といふに、心て、かの
國人を尊んぶ、國姓といつとも、乃て、〇は、韃靼
を、明乃世に亡して、國字一統のよし、國号を清と申
きて、其一統しある次に、王とハ、聖祖といふ、余程
の器量も、乃て、又此王を、年号を康熙といはるに、依
て、俗も、康熙帝杯といふて、こも、よ、當時の王

はて四代、今年文化八年、辛未年、乃て百五十年を、
其國も、穩に治して、と、尤が、羅國中に、たのり
本國の通りに、風俗を、改定て、服の筒袖つむ、
し、の二帝三王、四聖人と、古筆の子孫も、
坊主にして、^モは、^モ其内孔子の子孫は、
近死か、と、また、元のほくて、置たり、所、
への世に、孔子の聖人の事、おや、に、つて、
に凝滞せず、と、世と、たし、う、つ、とも、
の風、下、う、た、事、お、
其子孫を、孔子乃廟、
其子孫を、孔子乃廟、

此て今もたるとこれとも芥子坊主の致しと申事
て、ム南んと右段の申事通ず、ハ羅國ハ世々相殺し
相奪けて王の統定はらとく其時々強者者かじ
おれた者かおはくと王と約して甚以て乱を為事て
ムコトをさして鳥羽義著りハ羅國の様子みんや
思はへいば犬の群聚をうけかてミ、強者弱者強
者他は侵せば強者これを制む故に群大かみつ
とまに伏せ然も其勢ひ子に傳ふはこれし漢
國の道是れ同じと申ふハ實ハ尤も事て能當つて
たはてムかやう乃國と漢學者流りて此國と心得

て、いり尔醉さふしてこれハとてハ此賤し或國王
と毛似帝志やめ天子じやのと申しはたう乃國と
中華杯と申すハ甚だ乃こたててム、大馬を我鈴
屋翁が馭我慨言と云ふ書を作して具はる論し置
こはし及にきて、夫子本也し、於不篤胤が説た
加へ、阿らくと申はハ、此れをへて御國乃内て物に
記し口にいハ詞も漢土とある、天竺にしるもへ
て外國の王字尊ん天子じやの、皇帝ふとくと、及に
もいふへ、此事てハふへてム、此様に外國此王共此
尊ふハ其王共の制度よりけて従ふハ國此者ハ

此の如く有るに事ふれ共御國乃人々多く諸鉞の王
とて天竺の王とて云うべしと云う乃事て又夫れ死
ん事杯も萌ふと云ふ事とていれんこと死ぬと
は身はかりとていふ事又其妻の事とてい
まとりめとて云て皇后志やのキサキしやのとハ
いふに元乃てハかゝるて此外のいひ様も是に
准つてしるす宜しいてムかしくも我々天皇と
北を奉つて外國の王と天子といふを毛を近しい
くハ載て則ち天皇多蔑し奉けり云と云てムか
のみいわくもしく賤し死漢國をら天に二日の日

ふ戎にふやらへ地に二人の王は於して他の國
乃君成ハハはくもふとむと有るや致しん
夫故かれ三國と云て魏蜀吳と三に別つる時
ふとも蜀の劉玄德に心ひん輩ハ後世にも蜀は尊
む故に魏ハはさしく漢の次と受いむれとも天子
といせむは其當時に有ても魏の入り蜀天子
といふハ蜀の入りは魏天子にして天子といふ
事とさらになくまは北魏南梁の世と申して北と
南と二にわかれてたつる時南をてハ北は胡
虜や阿祚とて此よりハみふとてハ島夷や漢とし

互に急ひきや賤し先て我方ならぬ王天子や去
とんとんぞか法ごものごはして天地の間に二
位とれと尊くはしはる天皇と載記奉りなから何
のもしとるなれた外國の王子いさくかも尊み云へ
支道理と南にありはせふと夫を儒者杯の心ふへ
例のせむくもろふしれ國にははつて尊記國をく
其王と天子と崇むへた天地の自からふる理の
やうに思はてためといふはとてもくく不辨へな
とてと譬とひまはつと國ふあろ己く國子たとし
てあたし國と尊とむは己り君ふ忠ふらんてをる

の君に諂ひ仕へとのり親が捨て人乃親をいけら
やうふ事てと抑わら天皇ははつ堅に申し奉れハ
天地に御始を遊らしつる天は神の御子ふはしく
て神代の始をわ萬代の末まで御山を通り遊
はして御尊はのとしかへかハラせ給ふぬ上を
又横にも天地乃間尔晋々御山を通り遊ハして御
とよとさの類ひましははね理ハ自から明ふるわ
あくム所字々乃諸越の王かといハ自らふを猥に
貴人にももてふしへはけきとも彼らハ實にさや
う尊らふへと謂々やこ有はせうや皆例の詐事

多以て強し貴けしもて於しは乃て之と申之故
ハはつ諸越て其王の事以往昔よりい多して天子
と稱へて多しを是らば甚あらさらぬ誣事て之是
をつらく考ふは處り彼盤古氏り左乃目へ日と
ふて右の目へ月と為さる杯いふ類ひの傳へり訛
てふらもあつやうふ物て我天皇乃御事と天
神の御子と申し奉る稱へり彼國此古しへ亦も不
れく聞へ有てとよかの國の上古乃王等り何
の辨へも形く一國を領しはるも乃ハ天は神の子
と云ふ者とは非り心得して已り國語多以て天子

と名告ふものと思はれりて之但しかれ國帝王世
紀といふものに神農氏之母有蟠氏名登則帝王之
稱天子自炎帝始也とあるにこれハかやうに名の
事と夫には神農をいしめて夫より後の王も亦も
このかたは神農の物なるは是ハ甚の僭稱と云て漫
ふる稱へて之をいふに我ら天皇の御事と天
は神の御子と申之終けハ實に天は神の御子に坐
まなり故て之をいふに古道の大意に申さる通り天
津神高皇產靈神の御曾孫天照大御神は御孫に坐
はす迹々岐命様と云の御國乃大君と定次御天降

遊ハさほく砌り天照大御神の御言に豊原の
水穗國ハ我御子孫の次くに去ろ次すハ此國自
り仰られて御天降ハし遊し叔爾々岐命様ハ此御
國の大君ヤ御定まり遊としし故此御國に固
り坐はしとる謂ゆめ國つ神等乃方よてわれと
とん同等に坐ははぬと云の意はもはてと成受け
て尊ミ奉て天降神ハ御子と申しなむ乃てムとハ
まつ爾々岐命様ハ御天くこと乃段尔々の大國主
神の弟一ハ御子事代主神ハ亦乃御國と御去とわ
てハして御父大國主神ハ此國ハ天降神の御子

に奉て玉ハと仰らまはる猿田彦の神ハ天の八衢
へ御出迎於さまて天降神の御子の天降はると聞
つは故に御前に仕奉らむとして参迎へ侍ふと仰
られさふを始免として神武天皇の御段ふとに
國ハ神さち皆く天皇ハ天降神の御子と申し奉ら
れいてムさきと此御稱を於てハわり御代々の天
皇に限つて申せハ御稱へて宛らしお勿躰ふく
も戎夷の王共杯乃名告わ居へきとてハかいてム
外國乃王ともハ何成證として天子とやら申せら
決して天子とふ乃はと謂ハれいふ夫故から

通杯予記しとる趣て云ひぎ免し事とハ見へど何
也小もハハ天皇の御稱の西戎國に如のく聞へ
しるを盗み去るにも相違なく若しさやうに事て
形けきや杜撰とおふもの當らぬ事て然めに
漢籍お泥んていす輩ハ天つ神の御子と申を御稱
れ西戎國おぼて及んで夫多かの國て盗みお採ひ
奉りし天子と云号れ又ハ御國へおへて来れば
物多と云事多知らしめて却らほふ天は神の御子
と申を御稱天子と書る文字を設ふ和訓の如
うに思ふものでハ夫はいまお本末を辨へぬのだ

に依ては古へお學んで本を心得て置べき事
でハ然れ小俗の儒者南んど一向おかれとの尊
と物小いひ思ふハ皆彼國書乃偽言に惑つて其實
おらぬと心得悟らぬ輩てハ其上已ハ國を身免て
人の國を尊むハハてりりの孔子は本意謂ゆる
經書や古物の掟にも背いてと云事てハ實に孔子
の本意春秋の旨を習ふと云らハ御國人ハ諸越の
と云て彼國人ハ他國乃を以て如くに云ふとこ
をよく孔子に習つといふ物でハ蓋其内ハ乃堯
舜禹湯文武王と云王どもハ儒者ハ其道乃祖とす

るべきふくはて尊ぶもはる事ふら其心り移は
て其以下の世々此王共にも押形へて尊ぶ又其國
と乞中華中國上國ふと云てふ多をら尊む余も亦
かへはて御國多し東夷をむきいひ形をと云は
是も畏く律れ御制は以て考へ多し此等ハ大及逆
に等しき罪くても然き共今乃御代に在書物乃上
の詞ふやハ御吟味もかくはして御答りるを故に
儒者られんと憚りもれ口に任せ筆不さうせて
かくめ類の狂言共字はへに云ふもしか或も致せ
とてハ抑書といふ物も天下尔弘大はて後乃世は

ても傳えりやハ物なれはかやうの横さばは申
て筆はハ重なり御答も有様に致しさいもの多し古
ハ大宝の御令にもハ羅國ハ蕃國の例に置れて其
使人をも蕃客とある上ハ必その御令に依て従ふ
ハ事てハ其字畏くも恐多し皇朝の御令にて
むいふ彼外國の制に従ひ御國子惡ははに申せと
去ふはかんや太しは罪人ては有まはる儒者も
云てハ羅人てはあてやせまいし皇國の人て御國
に居らむらたてハとうして皇朝の御法ハ背はれ
はせうろむ祿くくし或儒者杯ハ常にハの國と尊

んで申せ語試聞習ひ又抄進らる作は書字も見
ししてハ只其れ字善きに心得て進たるハ物の
心と知らぬ生し其輩はハ不から諸越といハ
て中國との中華といハ必しもかの國とどう
とい心て去ても無き共漢學問を人ハ彼國に書
計り字朝暮尔讀て居る故尔且も心も夫のなれて
自らハ彼國に王たり我王乃如く親く尊記者に思
えりて萬に正非を出来て其心からよく諸
越はく其主や思ひ何事にもかれの國事ハ漢
とも唐とをいハんで却て御國の事ハ日本と

本朝より去る事と今も皆非事とハ譬へく學問
此事字云にもからハ其學よとハ右く學問と云
て御國の古へ字學ハ却て和學ハ國學とい
と云てハ其ら則諸越と主とし御國に側
かしのは去はて甚以て有はしきとてハ是れも
正しくも外國乃と其は形ふハ其や人乃國の
と云ふは漢學なりわらんた學と云て此皇
國の古へ字學ハ其受はつてよくに學問と云
る本當の事と云からて自分乃國に其字は其を
漢學といはせ又佛學ハ其もわらハ其けて

佛學と云けりとも法師の徒ハ夫多友ハ佛學と
笑ひひはせんコトヤ尤ふとも國學と云時に尊小
方尔も取成はれるやうさけれとも國乃字と付て
云も事に依りて猶受はらぬ云状てム世の人乃
物言はゆり凡てりやう乃云とくに内外の差別
をらそ外國の内にし御國字外にしとめ言のこ
り多いのハ漢籍を々て讀みまはる事てそれ
ハ又も詩と歌との多去ふとて詩ハ思ふ心と言
ひいはるものふて和歌ハ我國の風俗にて云々杯
とやうにいふ云ひはつ和歌と云も受むらぬ事

又我國といひ風俗云々ハ皆皇國字狭ム小きム
傍にふしある詞て必そ皇國人の云ハ此詞はかひ
の状ていふし其ハもしかやう云と云言ふとな
らハ歌を思ふ心字速るわはかり詩も諸越の國歌
南て杯やうにこそ云ハ此事てム凡て何事字云に
し此心はへる内と外との辨へる事也や有らそ
皇國ハ内て諸越ハ外と依て彼國の事といふに
んとり辨けて唐ハ云ハ漢の云くもやうにいふ
ハ此ものてム皇國の事ハ日本本朝本邦我國云
と云ふ事事ていれいでム然る事世の人乃云

ハミヨカをさまた御園城外とし諸越河内おしこ
め計りてハ儒者の中てし御國醜れ有たる人ハ淺
見安正ハの水戸乃粟山潜鋒也土佐の谷重遠と
其仔ハにもちやう乃心もへれも思ひ辨へて猥り
下いハを彼國ハ中國や女と以ハ好らぬと云
く置ぬ人ハ希ふハ有さふれとも其王を御國人の
天子と云はてと非説と思ふ人ハ更にふ々専ら皇
國の學問計りたして我國字ハ身ハと知れハは輩
ハ是ハハ猶心法かすにいふ事てハ彼國ハ中國
と云りひつこと有るうハも其王字も天子とけ

にして云はしきとてハ殊に右申を通すハ羅國の
王ハこの天子と名告ハて謂れハ曾て於事於事
ハ元々ての事返りくよハ此意味多々わこ
ら乃誤多心得本が立てれかぬと道と諂ちかへ
萬れ過り此ハ作は則翁ハ馭戒慨言ハ尾張の
鈴木朗ハ書ける序に是義一立而群物咸定是義一
不立而衆弊墮生と申てあるう尤ふとて道多學ハ
大和醜と固然ハうとせぬ人ハとつと心に去免て
妄れ廻やうにありぬ物ハハ扱此ハり世間の漢
學者流の心得違多二三ヶ條申ます其ハ由は太

宰純り辨道書乃説に日本にハ元来道と云ふとふ
く候々の證據尔は仁義禮學孝悌の字に和訓有るを
侯元日本ハ元来あるを必和訓有之候和訓有る
は日本に元来こ乃事なれ故に候と申白る此ハけ
しうらぬ言ひとて此儒者をりててもむく大抵の
膏儒者まふらひひの學者ともとうく漢國
ハ教乃道わは事或鼻にかけ自慢といたして御國
此古ハハ教の形つと事なむとてくとくハ鼻
免はけれも是も甚乃心得違ひてハ其故ハから
國て謂ハ仁義孝悌忠信の類すへて人乃行々行

ハハ實有て行ふとしく致もはしれ事多致は
夫り常て有るむらハ此んの人乃上ハ教の道と云
事ハ入りはせや元来みらと云道の字ハハ
も本ハ往來の上ハ云とてハ彼國の字書の
道の字ハ注ルも道所由道也徐曰道者蹈也人所踏
也と云へて是元来ハ往來と云ふんて行人道路
の事ハ夫と人の行ひの上に借て云物てハ又御
國て義知といハ言々の訣ハは法知と云ハ路乃字
の意ハ則旅路ハよむち杯去ちと同じと夫に義ハ
字ハ添ていハハ不たて添るも此ハ其義といハ

言ハ返ホトク其眞の字は御の字の義れ詞てハ
其義知ト云ことハ道ハ字字ありてハ其の是も
正當にて居候モ夫ハからても道乃字も往來に踏
てゆく處といひ御國てミちといふ詞も神代卷に
うはし御路有と云ふ如く往來せる處ハ云此名多
ム然れハ古ハ決して人乃行ひの上にとつて申
ことモふし其故ハから人の謂ゆる仁義五常ハ如
此ハかやうに名目以作はる教めはてもかく皇國
れ古ハ人ハ皆つ孫ハ行はく正しかつとる故に別
に教れ道と云事ハ有へ此はははるてハこり御

國ハ御國ある處て萬國に勝てて尊貴印の見ゆ
所てハ諸越ハ既にもれでく申白も通て世の初
めりら致して惡き風俗て人のくは行ひ正し
らる甚猥もて有ふる故古の賢き輩々出ははに
道ハ教へ形として元來ハ往來して何ふ處に
名と人の上へ借て人の道と云小物て譬へハ人の
為はし事致すハ往來行り如記事故眞の大道
往還多ゆくらを以て云乃意て終に入乃上ふり去
やう上成さもものて又御國て人乃行ひと始免何
業の上にも道や去るに成ふのハ甚多後世ハ事て

皆から風を移し學んたも決てん志やに依てこく
ら乃記と能考へてとほと御國の古へに教の道と
云事々無つふのそと亦々尊い處と云記も知れ
は又かひ多教の道多作れて人字道といひ此は其
國乃辱ふ訣も知れりて何ともむく我國の古入
るはしも禁止すへて惡事も形かつと故に教の道
字立於ん物此は今た互に子共字育はて考牙
ても知れり生質れやかしい子とんむに志と
はいらと生得たといふからぬ子も自からに疑も
嚴く世承ふらと又盜心のある者も夫と我次

教の事もたれと盜心のある者もハ誰かぬすとも
かと教の者もふい教の者と無いとの差別ハ丁
とこんふも乃てム所とから國に教り有とて誇る
ハ盜といふ者も盜と字とて意見せられて嬉
りめやうふも此儒者の志くの慶氣り付ふんて
か此國は稱上んとして其教の事と言立るハ却
て其負の引倒しとるり御國は誇らむとして古へ
に教へといふとりふいと立て古のハ却つて御國
の美を顯ハせものてム返りくも人の上に教と
云物了るく惡事成はせはいに防犯の道具てム

夫故禮記乃坊言に之へぬ孔子の語にも君子之
道譬則坊與坊民所不足者也と云てあめ惡事はを
る者な多しハ教と云坊乃道をハ無用の物てハ
から國に惡事と云は者多いに依て其多禁ハ道
をも嚴重しふけりる南らん何とからハ辱てハあ
るはいら既ハ禮記ハし四郊多壘此郷大夫之辱也
と云へはハ孔子の語にも大道之行也謀閔而不興
盜竊乱賊而不作今大道既隱云々城郭溝池以為固
禮義以為紀以正君臣以篤父子以睦兄弟以和夫婦
以設制度ふと云てハかやうの事ハ心は

んる猥りハ狂言と放ち多ハ人字誤ハと云ハ實
に憎むハ事てハ鈴屋の翁の云ははせにハ皇國
の古ハハ言痛き教も何もむかハしと下ハ去も
て乱るハ事ハ天の下ハ穩に治由て天は日
嗣いや遠長に傳ハて来坐りささも彼異國の名に
倣いて去ハ去さ上もハ優れハめ大キ道ハし
て實ハ道あるハ故ハ道てハ事ハ道てハ事ハけ
きハ道ありしけりけりハ悉くしく去ハ揚はや
然らぬとのけらとたもハ言擧せとて何ハし
國乃とこあふく云ハ立はとふさ云於ハとハ

そ才も何も優也ある人はいひたてぬはうはくく
のわは者とかへて少り乃事字こやくしく云
あけつと誇はめる如く漢國有と道ともし云故
小返て道とし死事代のみ云あへはうり儒者も
く多急しらて皇國としも道なしと輕しむるよ儒
者の急しらぬハ萬に漢が尊ぶもの思へるハ心
く猶然もあてかん多此方の物知て人知へに是と
急しとらきて彼道てふとある漢國多うらやみて
強てこくにも道あてとあらぬ事共多云つと争ふ
ハ譬へそ猿と毛乃くと見て毛のふたぎや笑ふと

人れ耻て已れも毛ハ何物字と云て細ふるや強
て求出てとせて争ふり如しもを南交り貴きと急
しらの癡人の急しははあらすやといひ置れは
もく讀むと味むて道といふ言の有とふいとの差
別多能心得はり宜いて云の扱又仁義孝悌の事
和訓乃有ハのり御國に道のみ云て云の證據と
申せうはれらハ余てといへは笑しい事て云但し
此方をれしく思へと漢學者流ハ明辨おや云て
やんや稱ふといふは流てはり辨し置れはハ
ひむ其ハ右に段々申て通て御國の古へ道や云て

教の事せかんこれへ古の人ハ其行ひり正しき常
てあつた故てム行ひり正しいと云故に漢國乃謂
以爲五倫五常の道は正しい事てムこれら行ひり
正しくハ名らふ人とも實物にあらてム誠と云ハ
は五常の五倫ハと云類ひハ人々心に具足して常
と云つていぬ時ハ名をつけ去て支えてをふて
ム凡て物に名字付了事ハ彼と此と思ひ紛れり亦
依て附ふものて仮の物てム夫故から人も名を實
の實也とり又ハ大道り廢れて仁義の名あらずも
のふたてム譬ハ器物と云名はこれにんては彼

是終じて其ハ器と取よせぬ思ふとも人亦余
をへた様ハ形と云と強ちに去付ると硯ハ好しム
思ふ處へ孟子もつてくるやう物事にてきぬハ
依て名を去ものハ仮のものて實り貴いてムから
國ハ肝心の實物々手薄いハ依て後乃世にてハ正
しからる皇國の躰何つて名のむらば一は日
にハおへぬ事てム凡てからてハ何事にあらも名
目と云巨細に煩以得と付ておはるも亦既尔天
地に形とりて立ぬと云去ハ君臣の道はへ立ハ
ムとあやこりやにふる程の大變る國ともハ

況や余の毛ハ書面に記し又空名計りて立派其
物ハふ々去ハて佛經の諸佛芥のやうてム其名は
うてふ鉢りふん何乃かんのし事うあてはせ
う了然は漢學者於んと漫不其文面乃美し以名
目に計て迷して其心字以多御國乃古へ字も議ひ
むと致むと謂ひ了朽子定規なとてム皇國ハ今と
ても禽獸草木其外乃も既に毛名をばけん多ある
も乃成へくらもあは此らも後より名をばけて名
の形をばに前ハ此物々ふかばと云てふからふ
ら又古へも語こしハ文字ハ渡して後に名附け

物も有此らも名の自らつ多前ハ其物もふいと強
て去う然もや此らも目にみへ了物故に無つ
くと云へばいハ仁義孝悌ふとと捕はへハ形ち
此く目にミへぬ物故小強て元来御國人ハ心ふ
うはふと去て狂も事と去ひ放して有から鈴屋の
翁乃言ハるく小も儒者も其名に惑つて名りふけ
色ハ其事もふいと思つてとふも甚愚か事ハ譬
へもから國てハ人の心の上在意と云ひ情と云ひ
慾しい小類ハの種々の名りあめ事あ御國てハ
只心と計りて作り名共ハ無はふかとと實ハ意

も情も怒り有たに違ひなく夫以儒者の去如く預
らる是も漢籍より渡りて後に御國の人にも意も情
も欲もて去りてそら此ら皆御國人に固ある
の心とも夫の御國ハるに於て凡てから國
の教と借らぬ他乃國々にも此等ハる元と不
とくくにちめ事て其名こそ異れとも天竺にても
哩儒とを忠の事と爲播迦羅と云ハ孝の事爾底と云
ハ禮の事阿羅他と云ハ義乃事と云はれて其餘は
國々も准へて知るるよいてム所多かれらの類字
も只漢國の擬聖人り獨て始知りる道の様尔心得

ていと云ふハ返りて愚かるといハれは
しむる此とて考へて太宰としは漢學者流と云
ふ者心狭く事字知れりてム一躰から
國の教と云物ハ急迫に人に爲へて過て入れ
小智の限りに甚狭く作て定免さもめてム縣居翁
の云ハれはしたる春を漸くして長閑なる春
と云て夏を漸にして暑き夏と云る如く天地れ
行りハ凡て漸尔して至はる乃自然の唐人の心
ふら如く南らん春り立ハ即ち暖に夏り立ハ急に
暑ハはへたは屯是唐人の教へハ天地不背りて急

速尔倍屈有る事と仍て人の打聞には才覺有て此
と安々事より安に此と毛さうハ行われはるもの
天地此をす春夏秋冬に漸ふるに背けは故たと
いへれ又吾ら翁此をれ曰て小も漢國乃聖人と云
者乃所業以みれは君を殺し其國を奪取たる大罪
をハ覆ひ隠して世乃人不信せよんる為尔已り
身を行ひと甚々作て飾りて強て人のむはへ
さか或り以過る事ハは也又其教といふも
又已り子孫の人小國と奪りれん事ハ恐れ又人乃
是を奪はん事字にせよん人の是を奪はん事ハ

恐る故に人のちめへを限りて過きて甚あしく設
くる強事と然ると天下後世の人其知術と得悟
らして皆是に欺かまはしむるに誠に愚るは事
也や漢國小ても聖人と云者れ教の儘に能行ひ
めんも未聞へ其能行ふ所ハ皆人々自らら備へ
て生じつゝある物ふ事ハ知らしし教の功
もと思ふハ甚く愚る事也譬へく幅一丈の溝
を飛越るとてとひやうと教ふハ聖人乃道自ら然
れとも千萬人の中に一人も教乃如く飛事て死せ
皆些に三四尺の溝より飛越ると三四尺ハ教を

受てもも固より誰てもく飛處也や扱此教と學
小者の中に其徳不依て五六尺位ハやふものも有
りせり夫もほい小彼一尺ハと小事ありし又
其五六尺とふと女ものも甚し希ふ事也其餘
ハ不道中に飛損して溝中に陷り或も腰脚を傷つ
く元の三四尺まさへも急やそれぬやうに於め者
も多く有如く聖人乃道ヲ知りて學問をば者多
くハ邪智のミはさして身ヲ行を却て無學の輩小
劣る者乃と世ハハいといふ此二翁の説
と云と考へ通して擬聖人の道の自然の道と云に

是らぬと或曉るうといて人々の年おけ行ぬ
小智慧深くかり行々のハ春秋に漸尔暖漸に冷成
行り如く常の行乃ある限を三四尺の溝と飛越
め位あるところ天地れ道と云へ或とハ管の中
をて天と見て天論し井に住む蛙は海は知らぬ
たとへの如く狭く小さく擬聖人の道は自然の道
ハと心得て夫を記したる書とも仰山もてりや
し居俗人多とれハ彼世俗にいふ火打箱の中にて
握飯多焼つとせり如く甚しむかしいて○扱
又太宰純り説に凡堯舜の道れ外に奇異なる道と

立るハ皆左道不て候禮記の王制に執左道以乱改
殺と有之候左道ハ徒ハ先王の世ハ死刑亦行ハ
ふハ故ハ其説と口外ハ出ル事ハ亦候と云ハ
ハ是ハ堯舜ノ道也外ハ亦道也皆左道也と云
ハ甚ハ周陋ル事也抑外國ノ道ハ堯舜ノ道也
其外諸子百家ノ道も俱に戒ルハ私不制修スル也
乃故に實ハ何レ大道いづレ尤道と云差別アル各
ク其立スルと云ハ佛道ハ大道テ外ハ亦左道也
夫レ彼徒の已ク道と云ハ亦に道と稱シ儒者ノ外

の道とハ邪道又ハ外道と号スを以ても知ら
ぬ事也然レハ凡テ外國の道ハ大道と云も左
道也亦皆其道々の上ニ取テ私の説テ行ハ
べレ證據ハ皆無事也其世々ニ用ラ
レると察ラシメテ其世々乃大道尤道の差
別ハ死に非ざるも是又私の事ハ論ハ
シ然ルハ漢國にて儒者カんと推張テ堯舜ノ道字
大道と云ハ諸子百家ノ道字ハ左道と申スル彼國
にてハ世々堯舜ノ道ハ用ル事ハ居ル故の事
也王制乃文字引出して論ハレども彼國で有

これらへ相應ふは事なれども皇國小いとして、更に當らぬ事、且し西土の制度といへども、取捨して、此方乃事、亦御用ひなほ、事今いふ限、てハふいて、譬へて天竺の制度を以て、漢土に行て、漢人を制して、たれ、其罪に服を、有う、孔子も吾學、殷禮有、宋存焉、吾學、周禮、今用之、吾從、周といふと、以て知べ、支物、異國の制度を以て、擬、を、め、甚、不法、更、小禮記の文に泥むべ、事て、い、皇國の道よりみれ、擬、聖人の教、諸子百家、み、左道、論、然、字、膺、儒者、挾、見、識

もて何事、小、堯舜の道、周代の定と、其外な、る、ハ、異端邪説と号けて、合せて皇國の道、さへ、に、左道、といひ、一向に廢て、去、ハ、うと、む、ハ、返、を、く、く、周陋、事、是、ハ、漢籍と、小、必、則、古昔、稱、先王、杯、杯、類、以、思、よ、て、の、有、う、此、ハ、漢國、にての事、皇國の人にして、皇國の正し、或稱へ、る、道、ハ、叶、ふ、れ、抑、道、の、躰、と、せ、る、處、唯、君、ハ、君、と、して、下、臣、と、して、君、に、忠、を、盡、し、親、ハ、子、と、慈、し、子、ハ、親、に、孝、行、と、致、し、夫、婦、兄、弟、長、幼、朋、友、夫、に、は、う、あ、る、べき、の、正、し、き、處、と、は

して道と云へき物也。是ハ人々皆かゝるてハ
叶ハぬとて皇座靈神の御靈に依て生れふから
し多誰も能辨へいらざる。然れ共其真の道正
いと云ハ獨皇國れとのとて諸蕃國ハ内うてはな
い。其中にも漢土と薄惡レ國風な故に湯武南と
云もれ共出ては其大本とる君臣の道と云へ破
しく君を弑して國を奪ひ猶又弑虐の罪と遁れり
為小天命杯云事取返み亦其道を修飾して君
臣の道と云猶も嚴重ル作と添て種々道乃事々
書籍不記し然れしく制度を立てる但し其レハ

君と弑し國を奪ふ程の奸智ある者とも立たる
制度あり故其文面ハよと立洵に行届てみよめ或
漢籍に歴觀自古巨盜功臣強叛猾逆率多高才薄學
之士也と申ふハ漢人の語にして其間と云語あり
事と云扱一旦已れり奪取て又人に奪はれはし
文様にとて智慧の限を振つて作たは道な故
小残り處もふ支如く至る尤らしと書籍不記
しあれ共其書ハ無用に也傳ハる乃みて守るも
のふと此を其立たる制度と云も實ハ初然る已き
がやかりたる道ては其破りあるもの

又人にけうへはせはいとて立ぬの制度有る故に
人の用ひぬのて俗乃諺に盛衰りこなしぬりや去
如く南岳故に此の用ひけら尤て今世の人
て自ら放蕩階弱にして人の不身持と直さうと
構へ尤らしく意見成去さるゝとて誰り其の事字
用ひらうと孔子も其身不正雖令不徒といふも
此意であらう又不能正其身如正人何とも申おて
ふ扱今上尔堂籍成用ひ給ふ處は其便利かる處と
摘取て少の御用ひるさるゝのこの事、是れ彼の
人々以て言成廢をとう云類であらふ然ると儒小

の拘泥、了輩非心得多致し其儒道は皆が
ら皇國に用ひらうと思ふ何事、撫我則后虐や
離るゝと類の穢らひし言ハ皇國にて聞けへ
忌々しき事、又漢風のと成も少くハ御用ひは
はく多みて堯舜の道てなくハ治らぬ杯去ハ甚以
て程の事、皇國の御用ひるさるゝ處は彼國の定
めの百分の一ふも足らぬ事、若悉く御用ひは
らうとふらばけういハんやう、是れ我人て有る
形、然も有る此事、それとも皇國の人にしてハ
漢國の事、御用ひはらうと誇るれとハ余に

如何しきとて、又一筋に擬聖人の道と行へつと
思ふ人ハ行はせても見らば、禮記の内則と云
ミれど、彼一丈の溝ヲ飛越ると云教は類にて、實ル
生ハ恠心地も屯田いと思はれば、仔細にて、彼教
の如ク行ふ者も、世々一人もあらずかし、然
るに、元々の行ひ一としに、堯舜乃道に効はらむと
云人、其も混れら或左道にへる、又もしも彼教れ
儘不行くとして、を差支り有て、迎もて、支ぬとて
ム或人傍に在て、云下は然云は、汝ハ我意と立様と
ての固陋と有り、堯舜乃道を行ふとて、何々して、其

所為、其皆行ハむと事有、只五常と守り、五倫
以正しくせうとのこの事と云、拙者の云ふ、前
にも、女如く其名目、こぞハ無に、ふれとも、實物と
有て、是則堯舜乃道の渡り、未たり以前、固有の
道て、今人々の行ふ所を、更ニ堯舜乃道乃功て、自い
其名目の事共、以置ても、禮學容飾、或ハ君臣位と更
るむとの類、堯舜乃道を強て行はると云へ、此ら
ハ此らの事、行ハつと、定め者ハ左道の惡者、予し
て、且ハ顛狂、自は事論ふして、ム叔堯舜乃道と一筋
不取立く、大道と云ひ、皇國に、今行も、ゆく所と堯

舜乃遠に違ふ故に左道と云は是子譬へていへば
人乃家に寄食していぬ居候り折節主人小代つ
て家事とも取敗ひ形もせり後々ハ已り寄食人
小ほとと妄れはて主人以指て寄食人自らと詈
るり如く甚と笑し此事て堯舜の道も大道と云
ひ皇國固有の道は左道と云意ハ乃居候乃如し
ハ六國乃道は皇國に用ひぬまふ此意なり然る
に儒者らういふ鬼子道理もたもひ信すは人り同
く皇國乃道と左道と云云云云寄食人り本れ
居候なりと云昔こそは主人たと云を聞て實に主

人ると思ひいふと云とく殊にたらしむ吾徒も
みれく主人と寄食人との差はいと云分て誰
も誤るといふ事て云され皇國の道と云これ
く堯舜の道と始は諸子百家みな左道なる事論な
しと處字執左道以乱政殺と禮記に見へて然る徒
ハ死刑に行はるるを究らしこく純く不て今
少し委し人王制を引けりしや其の引出てハ身の
勝手にあし記故有る己まは具小引出其好
む處の王制に據て去りて云扱其文に折言破律乱
政作執无道以乱政殺と有て此らの罪を犯すも

の以不聽とて家語孔子も申す又同く
王制に行偽而堅言偽而辨學非而博服非而澤以疑
衆殺と云ふも純み安んじて居る其は
はつ折言といふも古へとてしは類破律といは漢國
多し蕃國と云へき御定かると中華と稱ふはと乱
名と云へ京と勝國信濃成信陽と云ふくひ又改作
とい何事代も漢風にせんといふ事ふも云へ左
道多執る改と乱はといふハ風俗と変し國家子危
△せうと謀るものて皇國の御制度にては亦乃非
名字謀及やいふ例て賊盜律に謀及及大逆者皆斬

と云へていぬ純も心ハ漢國の人て何ら共射ハ
皇國の人に混れハ無礼ハ皇國ハ律令不違背る
めは然れハ皇國乃御制にては禮記の制不て
其罪と遁れらや屯るに陳とへれ由りく率にして
罪以免れと云へたも乃抑儒者と云者ハか
とまた亦も義理に味を我國乃事不疎いと云も實
に奇怪と云へき者てハ世の人の罪以正し
て引出さば王制と以て却て已れり罪以己と止し
るハ彼謂ひ了吾ら室に入て吾ら身と執り吾ら
刺すやと云類とも云へ或事是又彼ら謂ひは天命

の然らまむる處にあらう○純はさ申ふも偏屈の
る儒者の諸子百家以異端邪説と名つけて其書と
讀はめ故尔其道と云ふを一概に取つた所な様
に存候云々畢竟諸子百家も佛道も神道も堯舜の
道に載さる世に立と能むを拜云ふも實に大突
不堪の事と先尔も浮屠氏の事を云た處に彼輩
の奴僕を使ふは君臣乃道弟子以養ふは父子乃道
又法兄法弟ある兄弟の道衆僧を和合して學問
せらる朋友の道は佛事に某の儀式ある禮
梵唄聲明の歌鐘磬螺鼓の鳴てハ樂にて釋氏も禮

樂を捨てハ其道行はさる儒者より見れば今ハ僧
侶ハ皆先王の道を受るにて候杯や申ふ此固陋は
又云一之様ふして是らも皆聖人の道と借はは
他乃國くふも某も不道ハあはと云事の證據は
あたれ共何として純う太如事不當らうて此ハ
人々常の行ひ已ら尊ぶ聖人の書に記しは事共
と似ふるとのありとみて斯思つたもので此胸中
の狭きと思ひ計られたる人似たる處あはら
以て斯くもあらハ佛者もても諸子百家何れの
道もてても其外ハ道と字指てさう云へたもので

其故ハ諸子百家の道何事も五常を廢て君父と
殺し盜賊をせしむ教へある道ハかゝ事ゆへに何
處も同じ筈乃事てハ猶其道々れ書ゆみて知るり
其内擬聖人乃教のみをうへへふる立派に去
てあまけせとも其行ひの跡についで是をみれそ
右に段々申す通りの訣にそはれて是れ聖人乃君
を殺し國を盜むとを教ふる道と云も此ふかや
うの事成も辨んて諸道何にもらむ聖人の道と載
りしむへ世に立ふと能ハすかゝ様の強言は云ハ
譬へハ小兒ハ我家乃上にてる月と云ら如くの

甚稚れ事てハ月ハ至らぬ隈ふハ萬國を御照しむ
はれぬ物と我家計りの月と思ふらたらし純り
説ハ是と同じ理てハ天地乃間の萬國漢土に言通
ハせさめ國何程何でませハ聖人の化流沙の西小
至らむと云言もある萬國上古よりの人固て活
物て産靈神の御靈に依て自然に男女乃交合を始
免摠て乃事を知て其通わに爲し来つゝるものと
然る淨純々如くあるハ聖人道は作らぬ前ハ萬國
乃人生れハ儘に木偶土壘人乃如く動交は
せむにいふ者と思はる様子と南人ハ小兒の如

く多ハあるはいら扱又世不漢學に迷はざる者と
毛々彼國の書をも中華に万国の師を採り我
人の扱れ心より去出は漫言以聞ていかに然
る事や心得漢國の教小非はれも諸事を苟し得ぬ
事と一向に思ふハ甚しき愚ふや漢國は教と云も
のハ吾皇國は正しと上よりこれを知れ白めと以
悉々しと教へたるものハ此事ハ湯淺常山氏説尔
聖人の教といふ物を名目を立て弟子ともて固く
守らせ大切をば處ん大抵ハ只今此子ともはに禮
と教ふ如く飯へ喰ふべきものやと云ふ同し

はへし道理精微於めと曾て覺へぬれと申す
純と同流乃學者おもやう面白き見解の人毛
有はて然る以強て禿鼻乃教小非されも道字ん知
らんと云ふハ例の文辭に迷はぬ痴心の譬へも爰
尔衣冠正しき装たる人と又外尔痴人と一人あり
其衣冠正しき人出て伴の痴人に向はて言にハ
汝空腹に至はぬれらハ則當不食を喰ふら宜ら
うと教へる處り痴人う聞て大に悦び此を悉く
人かふ此人の教にあらもハ吾ハ飢死へ死處て
あつこと太しと尊ぶ思ふら如く是を痴人あり

故て空腹に至れば當歳乃小兒といへとも母の
懐を開いて乳を探してはらされば教を受く
とも知へずといひ必知てぬともはかばか此衣冠正し
知人とも擬聖人やもの書物に譬へ痴人と云ひ純
と始め其道を奉ずる輩と云のて先小も加茂の
籍の説を引て申すは如く春秋の漸くに暖に漸
冷は成行亦く冷て聖人の教の如く急速に迫りて
教へずとも人たは者へ誰り漸くに其為へあはけ
を成せらす居はせう今の世も稚立ちり書は讀
て文義も曉は迫りしらは存讀書と廢え或は又

更小書は讀し事もふ者も時至れば相應に五常
五倫の道も行つて世に立行をも思ふへたて
△或人申すも今の世學問をせぬ人も相應に道に
外れざる事もふあやうに行ふも聖人の道渡り
てより予有余年行はれて世に徧満したるは故に
是儒學の功にあらずして何ぞ篤風去其は儒者の
常談て一通ても誰りさう思ふやうふれとも深く
思ひぬ僻言は儒の道は渡り来らさぬ古へ人乃所
行いと正しく自ら道に叶はて居はば何故であら
う是知をしく叶はぬ事ハ固く知はていぬ

ハ南いり或人又云然らハ學問ハ廢よりの事ハ拙
者古學ふへしく世ふましく生れ南からの真心
毛てす了小學問せとも何事ハあらんぞ云人
あきと此ハ乃子路と云り人乃申さる言を同
しく心地よけ不聞ゆれともけうてむハ其もは法
誰も身に付わる五倫五常は道ハ學む事とも知て
居らう其身の本ハは親先祖乃事と云めハハ學
問むらてと云る事何ふハと人として人の大本ハ
何なるも乃とも知らす不居んハ口惜此事ふもハ
勉免厲て學ふハ此事勿論ハ然れハ漢國乃學

ハはつ後ハはハしてはは古へ多學んで身の本と
知り又と古の正し御代の意多辨ハ其真心以
正しく回くして後漢國の事とも學んで古學の奴
に使ハてまもれてハ我り翁もかう教らハはしこ
猶ハハを禽獸ハはハ鳥ハ及哺の孝ハ是厲に兄弟
の義ハあわ狼に父子乃親ハ又虫にも蜂蟻ハと
ハ君臣乃義ハ何ハ杯去事共乃漢籍にも何ハと
と見へてある此等も克舜ハ道の及んこと古者て
有つら人として克舜ハ教ハ非されハ道子とらと
と云ぬハ國に對し先祖ハ對し禽獸にも答つた

不法者と云ふし純れと則是く○扱又前に申す
は純り説の堯舜の道不非けきハ世に立て能くす
候とある其文の續記に傳れん中華は古代も日本
の今れ世も天下を以て堯舜乃道尔く治り候と
く諸子百家及び或ハ佛道或ハ神道以好むハ其國
家の乱るく端にて譬へく病かき人の妄に吐下攻
撃の藥と服せり如くふるへく候とある此中華
の古代と限けて云ふは甚笑しハもく堯舜り道ハ
西土尔てハ古代亦計て益有て後代亦ハ益り道
て有り夫と大中至正ハ道とは何事と彼頭かく

して尾字出しさる譬への如く純爰小至て大なる
る尻尾ぬ出したてハ夫に付て思ひ出した笑し記
談りある或山寺ふハの亦よりと云事亦々年
久しく庵主と成て住すは老法師有と處り朝夕
佛に仕へる事いと多きやうて讀經の聲撞木の音
をゆる事南と懈怠形いに依て聞傳ふぬ人毎にい
みしと尊貴聖人と云て甚やんハと云者に譽尊
んこと云事てハ然る此法し或夏の夕法方佛小向
い讀經して居る處り谷間より吹上ぬ風乃いと
心地を涼し氣不覺へてとく不眠と催し手

に撞木を拵たためよく我を思ひて打倒れ其處に寝
て志はたして述べた邊りの者共夫はと知らず法師
の物やいせうと申て打群て来てとぬれいと大
かめ狸の尾を出して衣を着た儘うち伏て居る
に依て人々始めて此法師の老狸と有たはとを知
ぬと云物語りある純も是と同日乃談云へる甚
笑し此事を公亮舜の道と功あは様に去るや計り
され共さるるに彼國の世より聖人此道と云以用
ひて治はばい事南く乱かハしれた思へる古今
に涉つて大中至正の道と受をけふはいひり孫

こととへる然も有て事と未委しく考へ通は
はれとも漢土の世くに五十年とく治はばい事
事ハあむといと思ふさそれ漢土の古代ハ治は
つこと云も覺束る況て其後の事ハ上段と云
如くなるもの字今何國を用ひてとも何の益り
何らう強て歡む好む時ハ只國家の乱る端て譬
へる病む人ノ喜む吐下攻撃乃藥と服をるる
如く更尔益於此のみに非と終にも廢人とれと
あり心すへ起して公叔純又樂の事ふとも委細
に辨へしはけし申たむと彼々著しとい和讀要

領ふとに皇國の音聲と侏離缺舌と聞ゆし漢國の
音聲字正しいと云ふは如灰僻耳てハ何事も覺は
らぬ事てハ禮記に樂記にも知聲不知音者禽獸
是也とも又不知聲者不可與言音不知音者不可言
樂ともあめ此人早くとり詩文の師とせらるると云
て厲と云ふ不有て詩と賦と漢文と書事以て
得たる處ハ皆人も知さる如く實に一つの門戸に
成らてハ然れとも其よしを道小叶ひぬめとも思
ふんといふ事ハ禮記の樂記にも記問樂不足
以為人師といひまゝ外の漢籍にも記問文章不足

以為人師以所學外也とも云てある詩文の如き技
藝は能得ぬれハとして何て有る此ハ俗間に時行歌
と作り或ハ豊後節の文句多作はると業やする者
杯と同等の事小く更に國用ハ益亦ててハ然ら
ば何と道の師とすは程乃事有る是らの事少し
心と用たたらハ誰しの人にも出来ぬ事乃事
技藝不名あるを心あめ人の耻とする事てハ扱
此人詩文成於ては然ることくしく譽立ち程のと
らぬ元禄寛保の間ハ未だ學問の道大いに開け
たり時代な故に純杯も識者ハ頭數には入りた

と共今や學問の道大いひいけ白了其眼と以て渠
らり唱へ了古學と云説とも多みるに甚片腹心
こ交杜撰乃至多く未しきもので今乃西にも純
才なき者トハ渠等々學風と愛慕ふ者もほ有と
と是を以前高名なりし事ハ世に流れ来りて未
其説乃稚記多悟らさる故其事てハ此後漸々に彼
いり學風乃廢て行ハる眼前の事マ今乃俗に
儒者多うらとて實にも道字尋添んものやもせ
其身持放蕩階弱にして詩文字の之主と致し只博
覽多識と呼れて誇らつとこれハ構へみこす人の

子弟字ハへ不其黨に引入れ返はる道以尋律義
ふる學者と云見識せはしふと去て片羽者以如く
去ふし世間の風儀と云ふ亦おはれ始皇ハ是
からハ冗尔もと思ふ計マふは儒者ともは世ハ多
之ハ皆純々輩乃流しこ了惡學風てハ譬いハ不
優れハ了人ハても稀くハ誤り有れにハあらは
る子純ハ第一ハ大本立は了學問故に非事乃多
いてハ又經濟れと云々女にも不經れと云々な
らも孔子も不在其位不謀其政とも有了純々黨乃
儒者ハも經濟ハ云ハ天下子玩ハ意ありや申て

生涯いそぐ人少者あり宜ふるとて又宋儒の
學と唱ふる儒者より聖人此旨を違はるといひ口
と極きて呵はふふも其流の輩も大概ハ純々
如夫偽儒にてハかゝる春秋の意を守りて我國の尊
み山崎闇齋淺見綱齋ふとの云ふ説にい其も勇健
しく猛く雄くし皇國魂の言も多いてハ純々學
風く此らと表裏て若く昔元の世祖々如く皇朝子
襲ひ奉らうとて西戎より攻来ぬ事も有う然らば
中華の天子に射向むん事東夷としてある由し夫
事於於といひふれて歸命投化と心得申と脱戎て

西戎の膝下に屈せし國を賣うとするハか様の儒
者て有うと思ふ斯く者多ハ佛者より師子身中虫
と号けていともく憎むハ此物く仁王經と云
佛書ハ乃是住寺護三寶者轉更滅破三寶如師子心身
中虫自食師子非外道也と云へし純々ハ此虫に
似たせて人學ハさる道法知らず杯去言も亦此
少も學文も純々如く學んては次に國乃害と成事
了更に學文も農夫山賤乃類ハ一向ハ我國の尊く
有難き物此事ハ心得居て外ハ異念自此物と云
或漢籍ハ偽儒奔競營名不如保細民之廉耻と云ふ

あり然るこゝと譬へん汗牛充棟の書ハ更にも
公は十三經二十一史諸子百家古今小説の書五
十餘卷の佛經と有諸誦して有うとも國忠の志有
大本立はは學者の書淫蠹魚の類かて農夫山賤
此をばはるかみれはもれと云へり或人の申ハ辨
道言の文意ハ小角復友人書中乃語以徧次しと為
物親族正名ハ伊藤氏が釋親考と取て和讀要領ハ
羽倉氏の讀書指要と採ふのいも申す又或書にも
聖學問答にハ西小角の說子生剝に云ぬと此
多しとて甚く呵て又或書にも辨道書の中に釋氏

の事と云ふと増穂大和の八部書乃說以編次し
のい云はしむ實然もれハ井澤蟠龍云に
は如く彼信天翁と云ふ鳥の類にして純は學者の
風上にハ置はしむ穢らハしむたの者てハ其ハ
蟠龍の說ハ他乃說多以て我説として誇めり志士
のあへてまきとと弊習又歎くへし依て思つに
丹鉛總録小信天翁ハ鳥乃名溟中に有り其巢と食
ハ共自ら取事能くハ與鷹の取て落せるものあま
ハひろいて食へり蘭廷瑞の詩ハ荷錢苜蓿綠江空
啜鯉含藻淺草中波上魚鷹貪未飽何曾餓死信天翁

と有他れ説字我説と屯る者ハ大の信天翁不相似
ととや申し是々付て己また謂ふに此風ハ學者俗
間に多々有りのな是共然る者ハ決して學文も踏下
り事な語相て見るといふと未しく心も浅々し
死者其者共り人乃よれ説以盗みて已り説ふ
と誇り他人を談了は聞ふ自らの説々人れ説々の
差別は能聞分つて譬牙は雞鼠の磐石の傍不在
我を此石字負て来たといふ如く大概は水花の
立て此々分る物で心ある人等皆笑ふ事て公其上
にも笑しいと爰不聞了事と彼處不語りかこ

小のつとを此處不談して其は腹惡交晩母り人
の間言字去あゆくら如々何り事知り貞に立廻る
者もゆく有るらやう乃考は俗ハ才子と去一
鮮本に養ふ處なきもの故ふ其よ或説以語り記
せしる人字も既に忘れて又其人不對して其支
ふるを我物にしてととらゆしと諺めとも有は
とにかとに此癖ハ心汚穢を業ふるハ言ふ不及ハ
と甚愚直ぬ事てらくる記さふ此心所で用から
已道得るで氣に一向に孔子と信し候孔子も我
小印可して下さるると申すハ餘りに押のはる

事てん純ら如れ者に印可をばやうに孔子らへ
更に好人とハ云れり是ハ或漢籍に欲讐偽者
必假真と云ふる如く皆愚人を誘ハふとのさは
か事ハ實に孔子以信せり事此らは其教多きを
守るべき事不ば不更尔其意とハ異おして今世
の賊僧とももの己ら道の五戒をハ此らにハ此事
缺ハとして漫て釋迦を尊み負せると同じ事南
で憎むべしと云ふは其意ハ此らにハ此事
西籍概論大尾

